



## 年間第 28 主日 (ルカ 17:11-19)

あなたのすべてを知ってくださる方がいます

年間第 28 主日 C 年の福音朗読は「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」という物語でした。6 年前の説教ですが、内容が面白かったのであらためて取り上げて、今週の学びを得たいと思います。

間違い電話は、よくある話ですが、わたしは過去に間違い電話の人とお友達になったことがあります。デートして食事をしたりとか、そういう付き合いではなくて、間違い電話のあとも、しばらく電話友達になってあげた、という程度です。

深夜に、電話が掛かってきました。主任司祭を始め、その教会には 4 人の司祭がいて、わたしはいちばん若い司祭だったので、先輩司祭よりも先に電話を取る必要がありました。深夜に電話がかかっても、まずわたしが電話を取るわけです。

電話は女の子からで、中学卒業後高校に行っていない子でした。本人はてっきり、自分の彼氏に電話をかけているつもりだったらしく、「もしもし」と言ったらいきなりまくし立ててきました。日頃あまり話を聞いてもらえないのか、よくまあ間違えている相手にこれだけ話せるなあと、しばらく感心して聞いていたのです。

「あのね、電話間違ってるけど。」すると、その女の子はびっくりして、すぐ謝りました。わたしは面白かったものですから、「大変だね。良かったら続きの話、聞くよ」と言ったのです。2 時間くらいは話を聞いていました。

話を聞いてもらって、嬉しかったのか、また電話していいかと言うものから、あーいいよって、返事をしたのです。まだ若かったので、深夜の電話を受けても次の日の仕事に響いたりはしない時代でした。10 回くらいは続いたでしょうか。その後は安心して、ピタッと電話はやめました。

電話の相手をしていて、こんなことを思ったのです。どんな人でも、自分がここにいるということを、必死になって知らせたい、知ってもらいたい、分かってくれる人がいてほしい。人は自然に、自分を分かってくれる人を求めるんだなあ。そんなことを感じました。

福音朗読ですが、重い皮膚病を患っている十人の人が、イエスに憐れみを求めます。律法の規定によると、重い皮膚病と診断された人は、社会から切り離され、礼拝にも参加できず、共同体の交わりに加わることができませんでした。家族とも離れ離れでした。健康な人が重い皮膚病の人のそばをたまたま通るときは、重い皮膚病の人たちは大声で「わたしは汚れた者です。わたしは汚れた者です」と叫んで、知らせなければならなかったのです。

こうした律法の規定は、重い皮膚病の人をさらに追い詰めていただろうと思います。誰もが、自分を分かかってほしい、自分を知ってほしいと思うのに、当時のユダヤ社会は、自分たち病気の人を避けるように、関わりを持たないようにと仕向けていたのです。

そこへ、イエスが通りかかりました。本来なら、「自分たちを避けて通ってください」と大声で叫ばなければなりませんでしたが、なんと「イエスさま、わたしを憐れんでください」と叫んだのです。自分を知ってほしい、自分を分かってほしいと、大声で叫びました。

この人々は、どこかで、イエスの噂を耳にしていたのかもしれませんが。自分たちを分かってくれるのは、この人しかいない。だから、必死になって、自分のことを訴えかけたのでしょう。

イエスは彼らの訴えに耳を傾けました。イエスは、すべての人が、たとえ社会から切り離されている人でも、自分を知ってほしい、自分のことを分かってほしいと思っていると十分理解していたのです。イエスは人間の心の奥底からの願いを知るお方なのです。

イエスは何も特別な動作はしませんでした。奇跡が起こり、重い皮膚病はいやされました。問題はここからですが、サマリア人だったとされていますが、十人のうち一人だけ、イエスのもとにかけより、感謝を捧げたのです。

わたしはこう考えました。最初はイエスに自分のことを知ってほしいと十人とも願ったのですが、自分の置かれた状況を理解できる人はイエスしかいないと感じたのは一人のサマリア人だけだったのではないのでしょうか。残る九人はユダヤ人でした。ユダヤ人は、ユダヤ人社会に戻ることで、迎えられる可能性があります。

ところがサマリア人は、ユダヤ人と敵対関係にありましたので、たとえ健康を取り戻しても、社会的には孤立してしまう可能性があったのです。ほかに何も頼るものがない。そういう中で自分を知ってくださった唯一のお方に、感謝しに来たのではないのでしょうか。

ここからわたしたちが学びたいことは、「イエスだけが、わたしの拠り所です。」そんな気持ちが、わたしたちの信仰にあるのでしょうか、ということです。信仰は持っているけれども、拠り所はほかにもあって、イエスだけを拠り所に行っているわけではない。それがわたしたちの現実の生活ではないのでしょうか。

人は、見られたくない部分は人に隠そうとします。それは家族に対しても、一緒に生活している人に対しても同じでしょう。そんな中で、わたしの良い点も悪い点も、すべてを打ち明けて拠り所になれる。そんな相手はどれだけ探しても見つかるものではありません。すべてを知ってもらうことができるのは、イエスのほかにいないからです。

感謝しに来たサマリア人は、イエスを自分の唯一の拠り所、すべてを感謝できる唯一の相手として理解しました。わたしたちも、日頃受けているもの、良いものも悪いものもすべてを感謝できる。イエスに対して、あらためてそのような信仰を呼び起こすことができるよう、このミサの中で恵みと力を願いましょう。